

どうぶり

会員拡大キャンペーン用

活動紹介 特別号

連絡: 上田昌文(横浜市港北区太尾町 810 ソフィア
大倉山 213) TEL & FAX: 045 532 1958

電子メールでの連絡は

uedaki@terra.dti.ne.jp まで

価格: 宣伝用特別号にて無料

ホームページ

<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/4190/>

この冊子(PDF 版も含む)は、できるだけ多くの方に無料で配布して「科学と社会を考える土曜講座」の活動を知っていただくとともに、会員になっていただいで一緒に活動していくことを呼びかけるためのものです。以下のような構成になっていますので、じっくりご覧いただければと思います。この冊子は転送やコピーなどをまったく自由にいただいでかまいません。上記の連絡先にご連絡いただければ、こちらから郵送または配信することもできます。どうかよろしくお願いします。

<目次>

- p1 土曜講座って何?
- p2 土曜講座の活動場所は?
- p2 土曜講座ってどんなことをしているの?
- p5 土曜講座の「会員」って何?
- p6 土曜講座に参加するにはどうすればいいの?
- p7 土曜講座はこの先はどんなことをしようとしているの?
- p7 土曜講座の「プロジェクト」ってどんなことをしているの?
- p8 土曜講座のスタッフってどんなことをするの?
- p10 土曜講座は今までどんな研究発表をしてきたの?
- p11 『どうぶり』って、どんな会報なの?
- p14 土曜講座からこの特別号を受け取った皆様へのお願い

土曜講座って何?

まず、活動の目的・趣旨についてお話しします。

科学技術が私たちの生活や地球の未来を大きく左右する時代に、私たちは生きています。科学技術の進歩を支え、その成果を受け入れていながら、一方で私たちは、前途に大きな不安を感じています。化学物質の氾濫、原発の重大事故の恐れ、遺伝子組み替えやクローン技術など生命操作の日常化、地球温暖化や森林の破壊.....。

科学技術をどうにかして適正にコントロールしない限り、こうしたさまざまな危機を克服していくことはできそうにありません。それには、これまでの「科学技術のことは専門家にお任せする」という姿勢を改め、市民が専門家や政策立案にたずさわる人々に自分の意思をきちんと示し、ともに問題解決をはかるよう働きかけることが不可欠です。そのままでは全く歯が立たないように思える専門知識に対しても、市民として上手に向き合っていく方法があるはずで

「科学と社会を考える土曜講座」は、科学技術に関連するさまざまな社会問題をさまざまな角度から取上げます。まず自分達で調べ、考え、発表する。専門家を交えた議論などをおして問題解決の糸口を探る。そして多くの人々やグループとの連携を築きながら、提言し行動する。まだまだ小規模ですが、仲間との人間的な交流も深めながら、この大きな目標に向けて徐々に歩みをすすめています。科学技術の問題に関心を持つどのような方にも、それぞれなりのかわりを持っていただけるような、次の活動を行なっています。 (以下省略)

(『土曜講座リーフレット』2000 年より)



土曜講座の活動場所は？

いよいよ事務所を開設することになりました！

土曜講座の活動場所は次のとおりです。

事務所

スタッフが定期的に事務作業や連絡業務を行い、運営会議やプロジェクトの勉強会、種々の打ち合わせでこの場所を使います。いよいよ 2003 年 1 月から東京都文京区本郷に事務所を開設します。とっても暖かい雰囲気包まれた一角にありますので、皆さん、どうかお気軽にお立ち寄りください！

<事務所の住所>

東京都文京区本郷 6 - 18 - 1

(東京大学の正門から歩いて 30 秒のところ)

<事務所の電話・FAX>

決まり次第、すぐお知らせいたします。それまでは、上田 (045 - 532 - 1958) までご連絡ください。

定例の研究発表の会場

月 1 回の定例研究発表は、毎回 20 ~ 30 人ほどの方が参加し、多いときには 60 ~ 70 人が集うことがあります。これはその都度、主として東京都内のどこかの集会場を使用しています。定例研究発表会のお知らせは、『どうよう便り』や種々のメディアに約 1 ヶ月前に広報として掲載しています。

土曜講座ってどんなことをしているの？

主だった活動は次のとおりです。

- * 月 1 度の定例研究発表会 (第 2 もしくは第 4 土曜日)
- * プロジェクトごとの勉強会、調査研究
- * 月刊機関誌『どうよう便り』の発行、出版活動
- * メーリングリストによる情報交換
- * 科学技術社会に関する出前授業、講師の派遣
- * 科学技術社会関連の書籍やビデオの貸出し

定例研究発表については別項をご覧ください。ここでは、『どうよう便り』やプロジェクトについて少し詳しく説明します。

月刊の機関誌『どうよう便り』

毎月発行している『どうよう便り』(A4 版 16 ~ 20 ページ)では、土曜講座の活動の紹介や報告、メンバーからの寄稿、おすすめの書籍紹介、イベント情報など盛りだくさんの内

容をお届けしています。郵送版と電子メール版があります。土曜講座の会員になれば定期購読ができます。

その他の発行物

- ・『土曜講座論文集 第 集』(1997 年)1000 円
- ・『大学問題 アンケート回答集』(2000 年)300 円
- ・『ビデオライブラリー リスト第 集』(2001 年)200 円
- ・『ザルツブルク国際会議 議事録 携帯電話基地局の健康影響に関する研究』翻訳論文集 (2001 年)2000 円
- ・『どうよう便り』バックナンバー 1 部 200 円 など

エコマネー「どうよう券」

土曜講座では、参加者の間でだけ流通する期限付きの“地域通貨”「どうよう券」をうまく使って、活動を楽しく盛り立てています。



プロジェクトの紹介

科学館プロジェクト

科学館に行ったことがありますか？そこはあなたにとってどんな場所でしたか？科学館プロジェクトでは、博物学研究、理科の学習、子どものための施設といった科学館の役割をさらに広げて、生活の中の疑問を解いたり、科学の最前線の話に出会ったり、研究者との交流をするなど、「行く科学館」から「使える科学館」「市民のための科学館」への具体的な提案を行ないます。

電磁波プロジェクト



「電磁波ってそもそも何？携帯電話がこんなに普及してしまって大丈夫？」といった誰もが持つ素朴な疑問。そこから始めて、東京タワーの電磁波を計測してその影響を探ったり、携帯電話に関する海外の研究をまとめたりしています。その調査結果を含めた、携帯電話の電磁波問題

入門ブックレットの作成に取り組んでいます。

科学技術総合学習プロジェクト

2002年度より小学・中学・高校で「総合的な学習の時間」が始まります。その枠を生かして、子どもたちが科学技術に関する様々な社会問題を知り、適切に対応する力を養えるように、教育現場の方々と一緒に、土曜講座がこれまでに築いてきたネットワーク、ノウハウや知識の蓄積を活用しながら、ワークショップや社会見学をはじめとする学習プログラムや教材を作成し提供します。

科学技術評価プロジェクト

日本の科学技術政策とその具体的展開である様々な研究開発プロジェクトを、市民の立場からどのように監視し、評価できるかを探っていきます。民主的な開かれた意思決定がなされているか、まっとうな研究開発目標が立てられているか、外部や内部からの評価がきちんとなされているか、無駄なお金が使われていないか、などについて市民として必要なチェックの原理と方法を明らかにします。

(『土曜講座リーフレット』2000年より)

次に、少し長い文章になりますが、この10年の活動を振り返った文章をお読みください。

市民が科学と向き合うために

- 「土曜講座」での10年を経て

上田昌文

土曜講座での10年

この連載で私は爆発的に進展する生命科学のいくつかの側面にスポットをあてて、それが社会をどう変えようとしているのか、そして私たちがその事態をどうとらえるべきなのかを明らかにしたいと思っています。今回は、私がこうした問題を提起し解決を探る上で土台となり手がかかりともなっている活動(「科学と社会を考える土曜講座」、以下「土曜講座」)を紹介しつつ、市民が科学に向き合うときのポイントとなると思われることを記してみます。

私自身が土曜講座の活動を始めたのは1992年の夏です。今年で10年になります。とにかく今の世の中で起こっているいろいろな問題を、ただ遠目に眺めるだけでなく、一歩でも自分にひきつけて考え、できることなら行動の手がかりを得られるようにしたい - という思いがあって、友人たちに声をかけて、半ば私的な勉強会のつもりで始めたのでした。何をどう扱っていくかを決めたのは、自分がいくら慣

れ親しんできた自然科学の素養を生かしてみたいという気持ちと、学生時代から数年間かかわってきた市民運動の経験で自分の中で生まれてきつつあったセンスや見通しのようなものでした。とりあえずのスタイルとして、科学技術に関連するさまざまな社会問題を、月1回か2回ほどのペースで調べ、発表することにしたのです。

多様なテーマを分かりやすく

いろいろな仲間が集い、個人的にも交流が深まってくると、次第に問題の扱い方・取り組み方の焦点が定まってくるとともに、取り上げる対象自体はますます多様な広がりを示してきます。私個人の資質もあるのでしょうけれど、活動を続ける中で明確に自覚できたのは、「可能な限り幅広いテーマを取り上げる」という点、そして「どんなに難しそうな話題を扱うときでも、初めて来たどんな人にも分かってもらえるように話す」という点の大切さでした。

これまで続けてきた140回ほどの研究発表会のテーマは、言ってみるなら、百科事典的に多様です。バイオテクノロジー、核・原子力、薬害、廃棄物、軍事技術、環境と経済、戦争責任、科学教育、映像メディア……。毎月の運営会議でスタッフと一緒に「こんな問題を調べてみたいね」と話し合いつつ決めているわけですが、これらのテーマの広がり、科学技術問題への攻め口がじつにいろいろあり得ることを示していると思います。未成熟なもの、問題の端緒にしか入り込めていないものも多いのですが、流動する世界の情勢に対応すべく分野・領域横断型の問題設定が必要とされる時代にあって、この振幅は何からの示唆を投げかけるものではないでしょうか。

また、分かりやすさを保ちつつけるという点は、裏返して言うなら、自分が本当に分かるまでしっかり調べ考える、自分の考えたことを仲間の考えと刷りあわせて吟味する、といった掘り下げのための努力があって初めて確保されるのです。もちろんこれについても、仕入れたばかりの知識を未消化のまま紹介しているという部分もあったりして、いつも成功しているとは言えないのですが、「自前の共同研究」を重視してきたこと、つまり素人がチームを組んで3、4ヶ月かけて勉強して発表するというやり方をできるだけ貫いてきたことは、必然的に“学問を既成のアカデミズムの世界にだけ閉じ込めないで市民に開かれたものにしていく”ことのひとつの実践であったと思うのです。分かりやすさの追求には、アカデミズムへの挑戦の意図が込められている、と言えるでしょうか。

市民自身がすすめる運動と研究

問題を知り研究を深めるのは、市民にとってはそれ自

体が目的ではなく、問題解決に向けて今の自分と今の世の中を少しずつでも変えてゆくためであるはずです。

「科学と社会」を扱う以上、専門性に切り込んでいくことは避けられず(研究の必要性)、しかも扱うのは被害・加害や利害対立を含む政治性を帯びている問題がほとんどですから、“客観的な”分析だけにとどまってはいただけません(運動の必要性)。

私たちが発足させているいくつかの調査研究チーム(「プロジェクト」と呼んでいます、以下PJ)は、一つのテーマに持続的に取り組みながら、その成果をふまえて省庁との交渉を行ったり、報告書をまとめて政策提言をしたり、学校や自治体と連携して新しい市民活動を提起したりすることを目指しています。現在は「科学館PJ」(各地に点在する科学館を市民と科学のよりよい接点を作り出すために活用する)、「電磁波PJ」(身のまわりの電磁波を実際に計測しながら、世界中でなされている人体影響研究を広くレビューし、政策提言する)、「科学技術評価PJ」(国が進める巨大な研究開発プロジェクトに対して、意思決定や資金の流れや内部的な“評価”といったことに市民の立場からどのように情報公開を迫り立ち入っていけるかを探る)、「総合学習PJ」(科学技術と社会の様々な問題をより体験的に知るためのプログラムを開発する)の4つが動いています。この中でたとえば電磁波PJは現在、携帯電話の電波の人体影響を詳しく調査していますが、並行して行ってきた東京タワーからの放送電波(高周波)、そして図書館などに設置されている“盗難防止装置”からの電磁波(低周波)の計測は新聞紙上でも大きく取り上げられました。

今後さらに、まさにこのエッセイと関連の深い「生命操作PJ」や「土と水のPJ」の発足が予定されています。

研究と運動の相互作用を重視する

私たちが取り組む学習や調査研究は“自前”を目指してはいるのですが、当然のことながら多くの部分をアカデミズムの研究者たちの成果に頼っています。では、市民とアカデミズムはどんな関係にあるべきなのでしょう。

アカデミズムは、個々の研究を継続・発展させれば総体として世の中全体の進歩に寄与することができる、という前提に立っています。研究者たちは、アカデミズムの世界の中でわりふられた個別のテーマを窓口にして世界を見ます。しかし現実の問題は常にそうした個別のわりふりの枠を超えたところで複合的な事態として発生します。原子物理学者はモノとしての原子の構造の専門家ではあるが、決して「核問題」の専門家ではなく、むしろ

「核問題」を問題たらしめている張本人の一人と言えます。「科学と社会」の問題はすべてこうした複合性を持っています。したがって、既成のアカデミズムの研究成果から私たち市民は学びつつも、逆にアカデミズムの分析視角そのものをも批判の対象にもしていかなければならないのです。学者と市民とが知識と問題意識を共有し、相互に批判的に摂取することで、研究も運動もより豊かで実効力のあるものになるでしょう。

そして本当に実りある批判を行うための土台は、やはり両者に人間的な信頼関係が築かれていることなのです。

科学者と素人の間の信頼関係はどこから

なにも科学者の場合に限りませんが、人間の有限性の自覚において他者と共通の理解を持つこと - -これが信頼の基礎になるのではないかと私は考えています。

あたりまえですが、科学者は生まれながらにして科学者であったわけではないのです。時代、そして個人の境遇といった様々な条件と制約のもとに、職業として科学の研究に従事するようになったのであって、それが唯一絶対の選択であったとはいえないでしょう。産業化社会においては、我々は人間の職能化した部分をその人の全体と等価とみなしがちですが、他者を理解するためには、その職能的に特化した部分だけに注目するのではなく、人間としての普遍性・全体性や同時代を生きる共通性にこそ目を向けなければならないのです。科学という活動も、科学者という職能も、人間の営みの総体の中に位置付け、人間の営みであるが故の当然の有限性(限界)を持っていることを、科学者も非科学者ともに白覚することが大切なのです。

アインシュタインは晩年、複雑な方程式で埋め尽くされた計算用紙の回りを飛ぶハエを見て、「アラーの神は偉大だ……」と漏らしたそうです。そう、どんなに高度に発達したように思えても、我々の科学は、ハエ一匹をつくりだすことはおろか、その生命の信じ難い複雑さをとらえきれないでいる、不細工で原始的な段階にあるでしょう……。

望まれる両者の交流の場

科学者は、いってみれば“説明の人”です。専門用語で武装された“説明”の要塞も、骨格は論理的整合性というただ一点であり、天空高く築かれたかに見えるその城壁も、土台は人間の基本的な知覚と常識的な認識にあるのです。「説明不可能な科学」なるものは存在しません。

そこで狙い自の一つは、科学者を市民との対話の場に招き、市民に理解可能な形で専門の知見を語らせることです。たとえば、開発が目論まれたり、導入が検討されていたり、あるいはすでに市場に出回っていたりする技術の問題点について、専門家に一般市民が納得のいくまで質疑に応じてもらうのです。そうすることで、専門の知見に潜んでいる偏った判断や、その専門性では解決のつかない問題の広がりなどが、専門家と一般市民の両方にはっきりしてくるでしょう。とにかく専門家たちが一方的にことを進めるという密室性を破るために、新しい制度的裏付けや支援のためのメカニズムが必要なことは明白だと思われます。

楽しく集い、素人の強みを発揮する

土曜講座を始めて痛感したことの一つは、いろいろな職業や考え方の人々が自由に物事を論じ交流できる場が今の大人にとってどれほど希少になっているか、です。職場に生活の大部分を吸収されてしまってそこでのつきあい以外の人間関係をほとんど持てないでいます。今必要なのは、職業にとらわれず私たちにとってより良い未来を共に構想する(そして各自の持ち場でその構想と建設的に向き合える)場、人間関係です。

運動というものは本来、明確な目標と戦略のもとに、参加者の意思と行動を統制していくという側面を持ちます。しかしその統制が強くなればなるほど、参加者個人の自発性や個性は失われていきがちです。研究と運動を“両輪”とするなら、その真ん中に「魅力ある人たちと集うことの楽しさ」や「今まで縁遠かった分野に関わっていくことのおもしろさ」を体験できるという“車体”が据えられていること。素人が素人の強みを発揮して生き生きと運動を続けていく秘訣はここにあります。

自分が直面する現実から生まれる問題意識を手放さず、粘り強い探究心を持ちつづける市民という存在は、職業的科学者とはまた違った意味で、一種の「科学者」たり得る - - それを私はこの 10 年の活動をとおして実感しています。“素人であることの意義・強み”を大切にして今の活動を続けていきたいと願っています。(季刊雑誌『ひとりから』に連載のエッセイ「生命へのまなざしと科学」第8回を転載)

土曜講座の「会員」って何？

土曜講座の活動の輪に加わるには「会員」になっていただくことが一番です。私たちの活動はこの会員の方々からの会費によって支えられています。会員になることの基本は、年会費を納めていただいて『どう便り』を定期購読していただくことです。以下、その説明をします。

『どう便り』をご購読ください！

年に 10～12 回ほど発行している『どう便り』（A4 版 16～20 ページ）では、土曜講座の活動の紹介や報告、メンバーからの寄稿、おすすめの書籍紹介、イベント情報など盛りだくさんの内容をお届けしています。郵便版と電子メール版があります。

購読代金：郵送版は 1 部 250 円（送料込み）
電子メール版は 1 部 150 円

定期購読：下記口座に「会費」として 1 年分の金額を振り込んでください（会費については次項参照）。

振替口座：00160 - 4 - 608503
加入者名：土曜講座

土曜講座の会員になってください！

種々の特典を付与して、純粋な賛助カンパも含め込んだ、次の 5 種類の会員を設け、年会費としてまとまったお金を振り込んでいただくことになります。「レジュメ」とは毎回の研究発表で配布される詳しい資料集のことです。

レイチェル会員.....年間 2 万円

『どう便り』郵送 and メール + 発表会参加費 (or レジュメ) + すべての土曜講座出版物 / 研究発表会に出られなかった場合にはレジュメを郵送

ファール会員.....年間 1 万円

『どう便り』郵送 and メール + 発表会参加費 (or レジュメ) / 研究発表会に出られなかった場合にレジュメを郵送

スカラベ会員.....年間 6000 円

『どう便り』郵送 and メール + レジュメ (年 12 回分)

ダーウィン会員.....年間 3000 円

『どう便り』郵送版のみの購読会員

ガラパゴス会員.....年間 2000 円

『どう便り』メール版のみの購読会員

いずれかの会員をお選びの上、次の郵便振替口座を用いて年会費をお送りください。

土曜講座に参加するにはどうすればいいの？

ここでは、土曜講座へ参加するための方法をかいつまんで述べ、その後に「会員」になっていただくため（あるいは会員であることを継続していただくため）の手続きについて詳しく説明します。

どんな参加の形があるのか

次の4種類の参加の形があります。

(1) 会員になること

前項で述べた5種類の会員のどれかを選んで、その年会費を振り込んでいただくことになります。会員には全員に『どうよう便り』が郵送・配信されます。ですから「会員とは『どうよう便り』の定期購読者」と言い換えることもできます。

(2) 定例研究発表会への参加

毎月1回の定例研究発表会は、どなたでも参加できる公開の集会です。会場で参加費(1000円)をお支払いいただければ、レジュメや資料をその場でお渡しいたします。レイチェル会員、ファール会員である方は会場での参加費はいただきません。会費として前もって1年分をお支払いいただいているからです。

(3) 「どうようメーリングリスト」への参加

会員になった方だけが参加できる“非公開”のメーリングリストです。参加したい旨を伝えていただければ、即日その方のアドレスを登録いたします。毎日数通の意見や情報のやり取りが交わされています。かなりアットホームな雰囲気があり、非常に幅広い話題を扱っているのが特徴です。遠方にいてなかなか直接参加できない方には特にお薦めです。

(4) プロジェクトへの参加

自らチームメンバーになって調査研究を仲間と一緒にすすめてみたい方は、是非それぞれのプロジェクトの勉強会に一度足を運んでみてください。どのプロジェクトも月に1回くらいの頻度で勉強会を行なっています。時には遠方に取材に行ったり、合宿をしたりすることもあります。自己申告すれば、勉強会などに参加するのに必要な交通費などは支給されます。助成金を使いながら期限内に報告書をまとめる作業などもありますので、プロジェクトメンバーは社会的責務を負って仕事する面があると心得ていただければと思います。

会員になっていただくための手続き

1. 入会は随時できます。

どなたでもいつでも入会ができます。

2. 5つの種類の会員があります。

レイチェル会員(年2万円)、ファール会員(年1万円)、スカラベ会員(年6000円)、ダーウィン会員(年3000円)、ガラパゴス会員(年2000円)の5種があります(前項の説明を参照)。このうちの一つをお選びください。

3. 現会員の方々には12月末までに「会員更新」の手続きをとっていただきます。

10月～12月に発行される『どうよう便り』に振替用紙を同封しますので、年内に2003年分の会費を振り込んでいただければと思います。メール版購読のみの「ガラパゴス会員」の方々には、最寄の郵便局にある振替用紙を使って振り込んでいただくことになります。

4. 年内に新しく会員になるの方々には年末までの『どうよう便り』購読料無料サービスが生じます。

2002年10月～12月に新しく会員登録なさるの方々には、入会された時点以後で年内に発行される『どうよう便り』は無料でお送りさせていただきます。年会費は2003年1月から1年分の『どうよう便り』にあてることになります。この年末までのキャンペーン期間に新しくレイチェル会員、ファール会員になられる方は、2002年10月、11月、12月の講座(研究発表)に参加される場合の参加費は、年会費とは別に会場でその都度お支払いください。年会費に含まれている「研究会参加費」は2003年1月から適用させていただきます。またレイチェル会員、ファール会員、スカラベ会員に郵送される「研究発表レジュメ」につきましても、年内の分につきましては『どうよう便り』同様、無料のサービスとさせていただきます。



土曜講座はこの先はどんなことをしよう としているの？

土曜講座は来年 1 月に事務所を開設することを機に、新たなプロジェクトやウェブによる情報配信サービスの開始、大型の定期シンポジウムの主催、年刊発行物や書籍などの刊行……と活動を上げていく予定です。どうか皆さんのご支援をよろしくお願いします。

2003 年 1 月からは新しい「[土曜講座ホームページ](#)」も立ち上がります。どうかご期待ください。

「科学と社会を考える土曜講座」が 10 年を経て、新たな飛躍を目指そうとしています。

科学技術が深く私たちの生活に関わっていることを考えると、市民の立場からその全体の動向をうまく把握しながら、社会に生じている様々な問題への的確な対処を見出していくことが必要です。

しかし、科学技術分野は、複雑多岐で専門性が高く、技術革新や研究開発の進展も速いので、よほど鍛えられた情報収集・分析の能力がないと全貌をつかみきれません。また政策的な意思決定も官僚と特定の専門家たちだけに委ねられるという閉ざされた（情報入手もままならない）状況が続いていますから、それを打ち破っていくには全体の構造を見据えた戦略的な対応が求められます。

原子力、遺伝子組換え食品、化学物質、温暖化、クルマ……などそれぞれのテーマで情報を集めて分析し、市民に役立つ形で提供し、政治の場での交渉や提言に生かしていくという、科学技術分野での NPO の活動が、ますます大切になってきていること - - このことは皆様は十分に理解していらっしゃると思います。

私たち「科学と社会を考える土曜講座」はこのような状況においていかなる役割を担っていく NPO であるべきなのか、私は長い間いろいろな試行錯誤をとおして考えてきました。

2002 年 8 月末に実施した夏合宿におきまして、この先 2、3 年をかけて実現すべきいくつかの取り組み、活動体制などをスタッフで話し合いました。

ここでは主要な項目を掲げるだけになりますが、

事務所を構えて、専従スタッフを置く
専属の「研究員」（複数名）を契約で雇う
大学や企業を含めた他組織・団体との具体的な協力・支援体制を築く

年間 500 万円ほどを要する活動費・経費に資するよう
収益事業を展開する

という運営面の拡充をはかりながら、

ウェブサイトでのサービスとして、ほぼ毎日更新される「科学技術時事情報モニター」（仮称）の配信
個別プロジェクトでの調査研究、政策提言につながる運動の展開

市民が主体となり官僚や専門家を交えて年 1 回の「科学技術政策シンポジウム」を開く

活動全体の成果をふまえて『市民版 科学技術白書』の編集

若手を育てるための短期集中型の「勉強会」の実施

など、土曜講座の特性を生かした活動を徐々に実現したいと考えています。このような構想の詳細は、それを実現する方法を含めて、今後の『どうよう便り』で少しずつ発表していきます。

（『どうよう便り』第 58 号 2003 年 科学と社会を考える土曜講座
「会員継続・拡大キャンペーン」ご協力のお願ひ より）

土曜講座の「プロジェクト」ってどんなことを しているの？

土曜講座の活動の柱である「プロジェクト」について説明します。

専門家ではない市民が自分の問題意識から出発して、問題解決のために必要な調査研究に乗り出し、仲間との議論や勉強を重ねながら、その成果をまとめていく - - これが土曜講座の活動の中心的な柱となるものです。私たちはその市民主体の調査研究を「プロジェクト」と読んでいます。

土曜講座では現在 4 つのプロジェクト（PJ と略す）が、それぞれ数名から 10 名のチームによってすすめられています。その 4 つとは、「科学館 PJ」「電磁波 PJ」「科学技術評価 PJ」「総合学習 PJ」です。詳しくは 2～4 ページをお読みください。これ以外に 2003 年には次のようなプロジェクトや企画を発足させることが予定されています。

「生命操作 PJ」……市民サイドから、クローン技術や生殖技術、生命の資源化・商品化、バイオビジネスなどの問題の焦点に狙いを定め、フィールド調査をします。

「家を作ろう！PJ」……東京近郊の地で実際に別荘を作ることを想定して、家作りに関する様々な問題とノウ

ハウを学び、実践します。地元地域との連携の拠点とすることも目指します。

連続講座「土と水の科学」……社会的に意義の大きい、土と水に関する最新の科学研究の知見を整理して伝えます。

連続講座「現代の戦争の諸側面」……生物兵器開発、劣化ウラン弾問題、米国の軍産複合体、宇宙開発などを取り上げます。

土曜講座のスタッフってどんなことをするの？

現在約200名の会員で構成されている土曜講座。その運営を担っているのが10名前後のスタッフたちです。2002年10月時点のスタッフは以下のとおりです。

代表： 上田昌文

運営委員（1年交代）： 小林一朗（会計を兼任）

運営補佐（1年交代）： 藪 玲子

編集委員（2ヶ月交代）： <会員から随時選出>

ウェブ担当： 上村光弘

地域通貨「どうよう券」担当： 後藤高暁

プロジェクトリーダー：<各プロジェクトごとに1名>

古田ゆかり、藤田康元、上田昌文、森元之ほか

広報補佐： 箭内敏夫、中村征樹ほか

ここで、実際に運営委員を担当したメンバーの体験記を紹介します。土曜講座の運営会議や勉強会の様子をつかんでいただけたと思います。

運営委員を体験して

藪 玲子

昨年（1998年）の春から一年間、土曜講座の運営委員をさせて頂きました。パートで仕事をしているとはいえ月の半分は自由になる私の身分は、さまざまなボランティア活動の標的となっていました。昨年土曜講座の運営委員がしばらく欠員のままになった時には、それまで三年以上も関わっていた手前「私がやるしかないかなあ」とおこがましくも思ったのでした。

「科学と社会を考える土曜講座」は1992年の夏に上田昌文さんが立ち上げられて以来、その活動は定例メンバーによって支えられていたものの、実質的には講座の運営や通信の発行などほとんどの仕事を上田さんは一人

でこなされてきました。その大車輪の頑張りとは四年続き、一人ではこなし切れないほど活動の幅が広がった1996年の秋、多くのメンバーとの話し合いの末に、新しく運営委員体制が導入されました。これが運営委員の始まりです。当初は「運営委員」という呼び方ではなく「常任編集委員」と呼ばれていまして、これに一カ月交替の「通信編集委員」が加わり、上田さんと三人で講座の運営や月に一度の「どうよう便り」の発行に携わることになりました。そのための運営会議が月に二度開かれました。

初代の運営委員は藤田康元さんが引き受けられました。藤田さんは大学院の博士課程で科学史を勉強されています。上田さんとはタイプが違いましたが、二人は気の合うところが多かったようです。

私が通信編集委員を担当した月に、編集会議のために社会問題研究所（通称「社研」と呼ばれています）に出かけてゆくと、すでに上田さんと藤田さんはいらして、廊下まで二人の声が響いていました。部屋に入ると、二人とも何かとても興奮した様子です。会話から察するに、藤田さんが1995年に公布された「科学技術基本法」の市民版を土曜講座で作れないかと話され、その思いつきに上田さんが大乗り気になられたのでした。これが「市民版科学技術基本法」の発端です。ご承知の通り、これは後に土曜講座の目玉プロジェクトとなりました。

藤田さんが一年数カ月で運営委員を降りられた後、はじめに述べたようないきさつで、私が二代目を引き継ぐことになりました。その際、再び運営体制の見直しをし、次の点を改正しました。

- （1）「どうよう便り」は1ヶ月に1度発行する。
- （2）編集委員は2カ月交替とする。
- （3）運営会議は月に1度開く。
- （4）運営委員の任期は1年とする。

これまで毎月発行していた「どうよう便り」を隔月に発行することによって、時間的にも精神的にも余裕が生まれ、より充実した紙面作りができることを期待しての改正でした。

運営会議は月に一度、上田さんと私と編集委員の三人の都合の良い日に行います。場所は三人が集まりやすい所、たいがい三人の住まいの中間点です。98年度の編集委員は上村光弘さん（5,6,7,8月）後藤高暁さん（9,10月）森元之さん（11,12月）平川秀幸さん（1,2月）古田ゆかりさん（3,4月）が担当されました。

いつも感心するのですが、運営会議の度に上田さんは、その日話すべき点がびっしりと書き込まれたレジュメを用意されます。「次号のどうよう便りの予定」「原稿の集

まり具合」「2、3カ月後までの講座の準備状況」「それ以降の講座の予定」「合宿の計画」という具合です。会議はそれに沿って進められます。とは言え、それから脱線することしばしば。最近の科学技術研究の動向、社会や政治の問題、パソコンやオーディオの選び方、本や音楽や旅行の話、メンバーの近況など……。運営会議のレジュメは、いわば脱線するためのレールのようなものだと言えます。

科学の専門家でない素人による研究発表が売り物の土曜講座では、発表者のサポートは欠かせません。前もって聞きたい点を知らせておいたり、集会や資料の情報提供、準備状況の確認、発表の打ち合わせ、スランプ時の激励など、最近は専門家が聴きに来ることも多いので、ことさら気合いが入ります。

専門家を招いて講演をしていただくこともあるのですが、その場合は「いかに有意義な議論を戦わせるか」が課題です。関連資料には目を通す。著書があれば読んでおく。講座の「傾向と対策」を「どうよう便り」に掲載する。さらに念を入れたい時には、講座を一回費やして「準備のための講座」を開きます。

もっとも、そんな受験対策的な手の打ち方ばかりではありません。先日の中野亜里さんによる「ベトナムの環境問題」の講演に際しては、みんなでベトナム料理屋に繰り出し、レシピの収集、食材の調達、自宅での予行演習と準備を重ねて、講座の後にベトナム料理を出しました。

運営会議は、このように一つ一つの講座を「いかに成功させるか」の作戦会議でもあるのです。

昨年（1998年）7月と9月に、私は上田さんと一緒に土曜講座で発表する機会を持ちました。テーマは「環境ホルモン」です。やりがいのある問題でした。

勉強に取りかかったのは5月末、マスコミでは連日「環境ホルモン」が取り上げられ、その過熱ぶりはピークに達していました。脅威を感じたカップ麺業界が新聞一面に安全宣言を掲載したのもこの頃でした。問題のあまりの急浮上ぶりに、専門書の出版が追いつかず、その替わりという訳でもないのですが、毎日のように各地で勉強会が開かれていました。手始めに二人はいくつかの勉強会に参加してみました。

専門家による勉強会は「環境ホルモンとは何か？どんな化学物質がリストアップされているか？」という内容といい、問題へのアプローチの仕方といい、どれも同じでした。そしてこれもお決まりのセリフ。

「ホルモン攪乱の実体はまだ解明されていない」

「ただちに人体に異変をきたすわけではない」

「パニックに陥るな」

それらの勉強会参加の成果として、上田さんと私は「こういうありきたりの内容はやめよう」と言う点で一致しました。

同じ「環境ホルモン問題」に向かい合っても、二人の関心の持ち方や見据える視点は全く違いました。上田さんは「ホルモン攪乱のメカニズム」を生物学的に詳しくひも解いたり、「化学物質のリスク評価」について細かい数字とグラフを使って論理を組み立てたり、といったことが好きでした。いっぽう私は『奪われし未来』のシア・コルボーンやひいては『沈黙の春』のレイチェル・カーソンの研究や生き方に魅かれ、また、化学物質にまみれた現代社会の構造をあばいてみたいと思いました。

関心のあるがままにそれぞれが勉強に取り組み、週に一度ほどの割でその成果を持ち寄りしました。その打ち合わせのなんと充実して楽しかったことでしょう。市民側とはいえ「科学の素人」とは言い難い上田さんと、正真正銘の「素人」である私との、この共同研究はそっくりそのまま「専門家」と「一般市民」という構図に当てはめて考えることができましょう。たとえ両者の間に圧倒的な知識量や理解力の差があったとしても、それぞれの立場で一つの問題に取り組むことは可能だし、その成果を持ち寄り一緒に考え、議論を戦わせ、互いに刺激しあうことは可能なのです。そして、それは実に楽しく、どっさりと収穫をもたらします。これこそ、上田さんが土曜講座の中で実践なさろうとしていることなのだと、深く感銘を受けました。

早いもので運営委員をしてもう一年。四月末には私の任期は終わります。土曜講座もついに四月には100回を迎え、その記念講座には池内了氏（名古屋大学）に講演をしていただくことになりました。

先日、上田さんと古田さんと三人で、会場となる表参道の「環境パートナーシップオフィス」の下見に行き、そのついでに講演後の懇親会をするお店を探すことになりました。感じの良い店があると片っ端から入って交渉をするのですが、なかなか予算面で折り合いません。青山学院大学の周辺を歩き回りながら、私はまるで三人が「土曜講座」という一つの同好会に所属する学生にでもなったような気分になり、愉快に思ったものでした。

来たれ、土曜講座の新入部員！

来たれ、運営委員！ 来たれ、編集委員！

今、新しい季節を迎えて、土曜講座に新たな風が爽やかに吹き始めることを願っています。

（『どうよう便り』第21号1999年4月より）

土曜講座は今までどんな研究発表をしてきたの？

土曜講座では月1回の定例研究発表会を10年間継続してきました。以下に、第1回から2002年1月に予定している第145回までの研究発表タイトルと発表者を掲げます。

定例研究発表会のタイトル一覧

1992年6月～2003年1月 全145回

1・英語支配を超えて(上田昌文) / 2・環境問題をどうとらえるか(上田) / 3・タバコに病む世界(上田) / 5・薬はいかにして薬になったか(上田) / 6・薬害の構造(上田) / 7・放射能とは何か(上田) / 8・世界の被曝者その現状(上田) / 9・原子力発電は何をもたらすか(上田) / 10・脳死と臓器移植(上田) / 11・生殖技術と倫理(上田) / 12・エイズと人権(上田) / 14・何ができるのコンピュータ(上田) / 15・コンピュータと正しくつきあう法(上田) / 16・遺伝子工学の危険性(戸田清+上田) / 17・望ましい医療とは(上田) / 18・エスプレントの話(戸田清) / 19・自動車の逆説(森元之+上田) / 20・戦争と差別の構造(中野亜里+上田) / 21・私たちの教育改革論[全員による準備読書会] / 22・教育はもういらない?(佐々木賢+松田博公、1周年記念講演) / 24・映像メディアと権力(田代良憲) / 25・科学とユートピア(上田) / 26・金融と地球環境(田中優) / 27・六ヶ所村の過去、現在、未来(遠藤堂太) / 28・原子力の現状(坂田広美) / 29・水と私たちの健康(森元之+上田) / 30・コメ問題から見えるもの(上田) / 31・実践料理講座(佐藤元信、忘年会をかねて) / 32・近代農業と畜産を考える(上田) / 33・身体と心、癒しの思想(仙田典子) / 34・自宅出産の経験から(真鍋淳子) / 35・優生思想、ファシズムと医学(上田) / 36・美容の科学の問題点(橋本富士子+上田) / 37・科学技術変革のための私的メモ(野村元成) / 39・カンボジアの教育事情(高橋佳子) / 40・ハイテク産業の動向と私たち(上田) / 41・第1回「TV科学ドキュメンタリー番組コンテスト」 / 42・戦後の医療と出産の変貌[全員による準備読書会] / 43・お産の世界からのメッセージ(神谷整子、2周年記念講演) / 44・ごみ問題の急所(津川敬) / 45・「動物の権利」論(戸田清) / 46・環境問題とエリート主義(戸田清) / 47・遺伝子解読研究

の真相(上田) / 49・『2010年日本のエネルギー計画』を読む(安藤多恵子) / 50・第47回の再講義 / 51・薬害エイズはなぜ起こったか(田代良憲+上田) / 52・大震災について考える[全員での討議] / 53・「TVの文法」をデザインする(門倉正美) / 54・HIV感染被害者の方と語る(川田悦子) / 55・なぜ原発は建ってしまうのか?(野村元成) / 56・E・モランの科学思想の射程(上田) / 57・風水の思想を追って(森元之) / 58・敗戦後50年の日本を問う - 沖縄戦によせて(林榮介、3周年記念講演) / 59・精神医療とは何だろうか(滝知則+川田晋+上田) / 60・長野県駒ヶ根市にて夏期合宿 / 61・アジアの地域医療の現場から(スマナ・バルア+色平哲郎) / 62・プレイバック原爆投下論争(野村元成+川根眞也) / 63・街の農業、食の未来(森田ナナ+小林フミ子+上田) / 64・「漫画・アニメと科学の交差点」第1回研究発表(MASCプロジェクトチーム) / 65・K・ウォルフレンを読む[準備読書会] / 特別企画「現代日本の社会と教育」(K・ウォルフレン、SEGとの共催) / 66・戦前日本の科学技術動員(田中浩朗) / 67・性差の科学と性差別(滝光子+竹中千枝子+上田) / 68・日本から緑が消える日(森元之+永野稔夫+上田) / 69・森は地球のお医者さん(宮下正次、4周年記念講演) / 70・第2回「TV科学ドキュメンタリー番組コンテスト」 / 71・大丈夫? 暮らしの中の新しいケミカル(薮玲子) / 72・旧毒ガス島(広島県大久野島)を訪ねて(高橋佳子) / 73・オカルト・超常現象と理科教育(西尾信一) / 74・実践! インターネット活用講座(伊東忍) / 75・素人が読み解く科学論(山口京子+上田) / 77・破産寸前国家日本の正体(湯沢文朗+上村光弘+上田) / 78・宇宙イデオロギーを批判する(藤田康元) / 79・第3回「TV科学ドキュメンタリー番組コンテスト」 / 80・現代科学技術の転換と市民運動(佐々木力、5周年記念講演) / 81・山梨県須玉町にて夏期合宿 / 82・感染症爆発の時代(上田) / 83・市民が作る『改訂版・科学技術基本法』(平川秀幸+藤田康元+上田) / 84・私のみたスウェーデン(樋口美智子) / 85・アフリカからみた理科教育と国際援助(大形佳代子) / 86・第82回の再講義 / 87・映画「ふれあうまち 向島・オッテンゼン物語」(熊谷博子) / 88・徹底検証! 遺伝子組み換え食品(山口京子+鎌形正樹+上田) / 89・村でみつけた生きる力 都市生活者が思い知らされること(真鍋淳子+鶴田康則) / 90・日米防衛・新ガイドライン 有事法制は戦争への道(島田信子、6周年記念講演) / 91・環境ホルモンの衝撃(1) その正体はどこまでわかったか(薮玲子+上田) / 92・静岡県湯ヶ島町にて夏期合宿 / 93・環境

ホルモンの衝撃(2) 合成化学物質の適正管理にむけて
(藪 玲子+上田) / 94・脱クルマ社会を目指して(上
岡直見) / 95・分散型(decentralized)エネルギーの考え
方(歌川学+西尾信一) / 特別企画「谷津干潟へ行って
みよう！」 / 96・地域で創る精神障害者への福祉活動(北
川侑子+後藤高暁) / 97・出版流通の現状と今後(森元
之+徳宮峻) / 98・ベトナムの近代化・工業化と環境問
題(中野亜里) / 99・地球温暖化の政治学(上村光弘)
/ 100・21世紀の科学・技術を考える(池内了、100
回記念講演) / 101・生命操作の世紀に向けて(上田)
/ 102・戦後日本の優生政策(松原洋子) / 103・公的介
護保険の光と影(箭内敏夫) / 軽井沢のICUセミナーハ
ウスにて夏合宿 / 104・原爆被害国になった日本(笹本
征男) / 105・地域ビジネスのノウハウ教えます(柏崎
房男) / 106・西暦2000年問題を考える(大和永乗) /
107・私が出会ったおもしろ人物紹介(森元之+藪玲子
+猪野修治) / 108・「大学論+地域エコビジネス」企
画のための温泉合宿(伊豆高原にて) / 109・自然住宅
に住みたいな(田久保美重子) / 110・第4回「TV科
学ドキュメンタリー番組コンテスト」 / 111・シンポジ
ウム「市民がすすめる大学改革」(井口和基、渡辺勇一、
新田照夫ほか) / 112~115・連続講座・お金と楽しく付
き合うために(向田映子、金岡良太郎、海野みづえ、染
谷ゆみ) / 116・現代病と中医学(清水宏幸、湘南科学
史懇話会との共同企画) / 117・高レベル放射性廃棄物
の地層処分を考える(林衛+高野雅夫+上田) / 118・
今、電磁波の何が問題か・「電磁波プロジェクト」発足
集会(懸樋哲夫ほか) / 甲斐大泉にて夏期合宿 / 119・
21世紀の科学技術政策を考える(上田) / 120・私たち
は科学館に何を求めるか(古田ゆかり+高橋真理子+中
島志円) / 121・科学館プロジェクト・合宿(山梨県に
て) / 122・三番瀬を見に行こう！(日本野鳥の会・探
鳥会に参加) / 123・レジ袋はなくせるか 有料化政策
の成功のために(舟木賢徳) / 124・ヨーロッパ環境先
進地域を訪ねて(小寺昭彦) / 125 科学技術コンセンサ
ス会議を考える(鍋木孝昭) / 127 科学技術社会と総合
教育 - 私たちの提案(総合学習プロジェクト・メンバ
ー) / 128 体験学習ツアー足助村訪問・伝統技術と近代
技術を比較する(小林一朗)、琵琶湖博物館訪問 / 129・
NPO法人とは何か(黒岩淳) / 特別企画 イギリス・
エコツアー(9日間) / 130・ノーマ・フィールドさんと
語り合う(9周年記念) / 箱根荘にて夏期合宿 / 131・
埼玉県小川町有機農業&自然エネルギー見学(案内：小
林一朗) / 132・高周波電磁波のリスクを考える 携帯
電話と東京タワー(電磁波プロジェクト・メンバー) /

133・第4回科学技術TVドキュメンタリーコンテスト /
134・紙の博物館見学+紙はこれからどうなるのでしょ
う？(後藤高暁+古田ゆかり) / 136・素人のための疫
学入門(上田昌文+小牧史枝) / 137・日本の戦後民主
主義とアメリカ(ロバート・リケット+笹本征男+猪野
修治、湘南科学史懇話会との合同) / 138・リスクコミ
ュニケーションのための科学的証拠のとりえ方 電磁波
人体影響の最新研究とエビデンス度(兜真徳+吉川肇子
+竹田宜人) / 139・新しい平和活動CHANCE!と持続
可能な社会への転換(小林一朗) / 140・米国の軍事科
学と日本の基地問題(梅林宏道) / 141・「ノーベル賞
の100年」から考える20世紀の科学技術(瀬川嘉之+梶雅
範) / 142・科学ジャーナリズムの可能性を探る(林衛
+浅川直輝+高重治香) / 143・立花隆問題とは何か(谷
田和一郎) / 144・キューバの有機農業を訪ねて(吉田
太郎+小林一朗) / 145・生物兵器開発とバイオテロリ
ズム(上田)

『どよう便り』って、どんな会報なの？

土曜講座はほぼ毎月1冊の頻度で、機関紙『どよう便
り』を発行しています。会員の方々には定期購読によ
る郵送・配信を行なっています。会員でない方々にも、
ご希望の号をご指定いただければ送料込みの値段でお
届けできます。内容をご推察いただくために、以下に
2002年に発行した分の「総目次」を掲載いたします。

『どよう便り』51号~59号(2002年) 総目次

51号(2002年1月)

プロジェクト報告：科学館プロジェクト(1)今年の課題は
2つ 科学館での実践と評価軸の確立 / 古田ゆかり(科学
館プロジェクトリーダー)

プロジェクト報告：科学技術総合学習プロジェクト
(1)2002年のスタートにあたり / 小寺昭彦(科学技術総合学
習プロジェクトリーダー)

プロジェクト報告：科学技術評価プロジェクト(1)市民の
立場からの科学技術評価を探る / 藤田康元(科学技術評価
プロジェクトリーダー)

プロジェクト報告：電磁波プロジェクト(1)2002年のスタ
ートにあたり / 上田昌文(電磁波プロジェクトリーダー)

特別レポート：「マクドナルド65円バーガー その販売
戦略を探る」 / 榊田みどり(ライター)

連載：ヨーロッパずっこけ探訪記(その7) ずっこけデ

ンマーク編～環境先進国のごみ対策／舟木賢徳（舟木環境経済政策研究所）

土曜講座・英国エコツアー報告：CAT（Centre for Alternative Technology）訪問記（その2）／重松真由美

土曜講座"地域通貨"「どうよう券」運用規約／後藤高暁（「どうよう券」管理者）

“おもしろブックス 2002”

*『都市経営の思想 - モダニティー・分権・自治』吉原直樹編著 青木書店 2000 年／山根伸洋

*『環境政治入門』松下和夫著 平凡社新書／今崎篤

*『グローバル化と女性への暴力』松井やより著 インパクト出版会 2000／薮玲子

*『戦犯裁判と性暴力』内海愛子・高橋哲哉（責任編集）緑風出版／薮玲子

*『日本軍性奴隷制を裁く「女性国際戦犯法廷」ハーグ判決概要』（報告集会資料）（バウネットジャパン 2001 年 12 月 22 日）／薮玲子

*『いのちの樹の木で - エンデとカーソンの道を継ぐ』子安美智子&上遠恵子 海拓舎 2001 年／猪野修治

*『スピリチュアル・マシーン - コンピュータに魂が宿るとき』レイ・カーツワイル著 翔泳社 2800 円／緑川ひかる

*『生と死の教育』アルフォンス・デーケン著・岩波書店／清水正人

連載エッセイ：浮遊する泉のほとりで(01)／空山海風

5 2 号 (2002 年 2 月 + 3 月)

プロジェクト報告：科学技術総合学習プロジェクト(2)ワークショップ「二十一世紀の預言」／小林一朗（科学技術総合学習プロジェクトメンバー）

プロジェクト報告：科学館プロジェクト(2)博物館評価の勉強会／古田ゆかり（科学館プロジェクトリーダー）

プロジェクト報告：科学技術評価プロジェクト(2)産業技術政策に焦点をあてて／尾内隆之（科学技術評価プロジェクトメンバー）

プロジェクト報告：電磁波プロジェクト(2)携帯電話を対象に研究助成／上田昌文（電磁波プロジェクトリーダー）

子どもたちの生殖機能に関する疫学研究の動向／上田昌文

STS Network Japan 2001 秋のシンポジウム「科学技術ジャーナリズムへの期待」より：講演「科学技術ジャーナリズムと市民運動」の要約／上田昌文

“おもしろブックス 2002”

*『わたしの哲学入門』木田 元／著 新書館・刊 1998

年 本体 2800 円／猪野修治

*東京水産大学公開シンポジウム渡邊悦生・中村和夫 共編『科学を学ぶ者の倫理』（成山堂、2001 年 12 月 28 日、1400 円（税別）／猪野修治

*『旅をする木』星野道夫／著 文春文庫／鈴木伸子

*徐京植対話集『新しい普遍性へ』（影書房、1999）／山口直樹

*市場淳子『ヒロシマを持ち帰った人々 「韓国の広島」はなぜ生まれたのか』（凱風社、2000）／山口直樹

*『そうだったのか！ 日本現代史』池上彰著 発行：ホーム社・発売：集英社 2001 年／高野雅夫

*『日本の大国化とネオ・ナショナリズムの形成---天皇制ナショナリズムの模索と隘路』渡辺治著 桜井書店、2001 年／藤田康元

連載エッセイ：浮遊する泉のほとりで(02)／空山海風

5 3 号 (2002 年 4 月)

全ページ特集

2001 年 1 月 26 日土曜講座研究発表より

「素人のための疫学入門

人々に共通するリスクの有無や程度はどのように推し量ることができるのか？」／上田昌文＋小牧史枝

日本金属学会 2002 年春期大会での発表より

「東京タワーからの放送電波の強度分布と周辺地域の電磁波リスク」／小牧史枝＋上田昌文

5 4 号(2002 年 5 月)

全ページ特集

第 19 回 湘南科学史懇話会

第 137 回 科学と社会を考える土曜講座

「日本の戦後民主主義とアメリカ」／まとめ：猪野修治

・ダワーを読んだの発言(1)なつかしさ・とまどい・希望
／笹本 征男

・ダワーを読んだの発言(2)個人と国家：戦勝国への教訓
／ロバート・リケット

5 5 号(2002 年 6 月)

総力特集

第 135 回 科学と社会を考える土曜講座

「紙の話、昔・今・この先は」／後藤高暁

プロジェクト報告：電磁波プロジェクト(3)「電磁波問題国際フォーラム」報告／薮玲子（電磁波プロジェクトメンバー）

プロジェクト報告：科学技術評価プロジェクト(3)産業技

術政策に焦点をあてて / 藤田康元 (科学技術評価プロジェクトリーダー)

第 19 回 湘南科学史懇話会 & 第 137 回土曜講座「日本の戦後民主主義とアメリカ」に参加して

- ・アジアの人々と信頼関係を築くために / 西野全哉
- ・女性に焦点をあててみると / 山中幸枝
- ・苦いケーキ / 月本房子

連載 : ヨーロッパずっとけ探訪記 (その 8) ずっとけドイツ編の序幕 ~ 異国の地でトイレを探してやろうの巻 / 舟木賢徳 (舟木環境経済政策研究所)

連載エッセイ : 浮遊する泉のほとりで (03) / 空山海風

56号(2002年7月)

第 138 回 土曜講座 (2002 年 3 月 9 日) 「リスクコミュニケーションのための科学的証拠のとりえ方」の講演より

- ・リスク・コミュニケーションという考え方 / 吉川肇子 (慶応義塾大学商学部)
- ・リスク・コミュニケーションの現場から ~ 新しい化学物質対策 / 竹田宜人 (東京都立大学・大学院)

プロジェクト報告 : 科学館プロジェクト (3) 科学館プロジェクトの今後の展開 / 古田ゆかり (プロジェクトリーダー)

プロジェクト報告 : 科学技術評価プロジェクト (4) 量子化機能素子「評価報告書」を読み比べて / 尾内隆之 (科学技術評価プロジェクトメンバー)

第 141 回土曜講座 博物館見学 + 研究発表「ノーベル賞の 100 年」から考える 20 世紀の科学技術に参加して

- ・「ノーベル賞 100 周年記念展」のガイドより / 瀬川嘉之
- ・武井武教授のこと / 後藤高暁
- ・「ノーベル賞の 100 年」から考える 20 世紀の科学技術に参加して / 鳥山 敦

土曜講座・英国エコツアー報告 : 科学博物館訪問記 / 瀬川嘉之

連載 : ヨーロッパずっとけ探訪記 (その 9) ずっとけドイツ編 ~ 世界が見習った拡大生産者責任と DSD 社の役割の巻 / 舟木賢徳 (舟木環境経済政策研究所 舟木賢徳)

“ おもしろブックス 2002 ”

* 日本の森はなぜ危機なのか? 田中淳夫 平凡社新書 2002 / 鍋木孝昭

* 北欧スタイル快適エコ生活のすすめ 高見幸子、鍋木孝昭 オーエス出版社 2002 / 鍋木孝昭

* 毛利勝彦『グローバル・ガバナンスの世紀 - 国際政治経済学からの接近 - 』東信堂、2002 年、184 頁、1500 円

/ 塩出浩和

* 「天皇制批判と日本古代・中世史」(ただし古代史の部分のみについて) 著者 草野義彦 本の泉社 2500 円 / 後藤高暁

* 『ユニバーサル・デザイン バリアフリーへの問いかけ』川内 美彦著 学芸出版社、2001 年 4 月 / 上村光弘

* 佐高信著『佐高信の政経外科 中坊公平への手紙 』(毎日新聞、2001) / 山口直樹

* 『コリア驚いた! 韓国から見たニッポン』李元馥 (イ・ウォンボク) 著、松田和夫 + 申明浩 訳、朝日出版社 2001 年、1500 円 / 上田昌文

* 『未来のたね これからの科学、これからの人間』アイリック・ニュート 著、猪苗代英徳 訳、NHK 出版 2001 年、1900 円 / 上田昌文

* 『新世紀未来科学』金子隆一 著、八幡書店、2001 年、2800 円 / 上田昌文

* 柳田邦男『犠牲 - わが息子・脳死の 11 日』(文芸春秋、1995 年) / 猪野修治

* 柳田邦男『犠牲 - わが息子・脳死の 11 日』(文芸春秋、1995 年) / 加納誠

連載エッセイ : 浮遊する泉のほとりで (04) / 空山海風

57号(2002年8月)

土曜講座 10 周年記念パーティ (2002 年 7 月 20 日) 『祝賀メッセージ集』の「あいさつ」より : 「10 年を経て、ひとこと」 / 上田昌文

アメリカ・エコツアーに行きませんか? / 薮玲子 (土曜講座・エコツアー担当)

総力特集

第 140 回 土曜講座 (2002 年 5 月 25 日) 「米国の軍事科学と日本の基地問題」 / 梅林宏道 (NPO 法人ピースデポ 代表、太平洋軍備撤廃運動 (PCDS) 国際コーディネーター、隔週刊『核兵器・核実験モニター』編集責任)

・梅林宏道『在日米軍』(岩波新書、2002 年) を読む / 猪野修治 (湘南科学史懇話会代表)

・市民運動家・梅林宏道の原点 - 科学技術者の反米軍基地運動を振り返る - / 猪野修治 (湘南科学史懇話会代表)

58号(2002年9月)

10 月 19 日の土曜講座研究発表に向けて : 「立花隆問題とは何か (上) 」 / 谷田和一郎 (ライター)

10 月 10 日のシンポジウムに向けて : 「持続可能な翻訳とは何か」 / 河野弘毅 (かわの・ひろき)

連載：ヨーロッパずっこけ探訪記（その10）ずっこけドイツ編～シュバルツバルトは本当に黒い森であったの巻／舟木賢徳（舟木環境経済政策研究所）

プロジェクト報告：科学技術評価プロジェクト(5)構築的テクノロジーアセスメント(CTA)について／吉澤剛（科学技術評価プロジェクトメンバー）

特別寄稿 科学エッセイ：テレビゲームと脳と私たち／古田ゆかり

“おもしろブックス2002”

*阿部潔『さまよえるナショナリズム』（世界思想社、2001）／山口直樹

*山泉進「憑依する大逆 「大逆事件」研究の現場から」『歴史が書きかえられるとき 歴史を問う』（岩波書店、2002）／山口直樹

59号(2002年10月)

第142回土曜講座「科学ジャーナリズムの可能性を探る」：国際核融合実験炉"ITER"に関する新聞報道の検証／科学ジャーナリスト（仮） 浅川直輝

第142回土曜講座「科学ジャーナリズムの可能性を探る」：与え合うコミュニケーションへ／高重治香（東京大学大学院学際情報学府修士課程1年）

10月19日の土曜講座研究発表に向けて：立花隆問題とは何か（下）／谷田和一郎（ライター）

プロジェクト報告：電磁波プロジェクト（4）超低周波リスクの報道と私たちの最近の活動／西野全哉（プロジェクトメンバー）

プロジェクト報告：科学館プロジェクト（4）科学館訪問記「アクアマリンふくしま」／堀井雅恵（プロジェクトメンバー）

プロジェクト報告：科学技術評価プロジェクト（6）評価委員へのインタビューに向けて／尾内隆之（プロジェクトメンバー）

“おもしろブックス2002”

*金子淳『博物館の政治学』（青弓社、2001）／山口直樹

*『パレスチナ 新版』 広河隆一 2002年5月第1刷 岩波書店／箭内敏夫

*斎藤美奈子『文壇アイドル論』岩波書店、2002年／松原洋子

*米原万理「嘘つきアーニャの真つ赤な真実」角川書店 2001年定価：本体1400円（税別）／西野全哉

*『誰も死なない世界』角川書店／緑川ひかる

連載エッセイ：浮遊する泉のほとりで(05)／空山海風

土曜講座から

この特別号を受け取った皆様へのお願い

科学と社会を考える土曜講座では、現在200名弱の会員からの会費が主な活動資金となっています。年間100数十万円の収入がありますが、残念ながら、事務所の維持、スタッフへの若干の手当て、プロジェクトの経費などをすべてこれではまかなっていくことは大変難しい状況です。プロジェクトによっては外部の民間団体からの助成金を獲得し、それで活動を続けていているものもありますが、土曜講座講全体の活動をこの冊子に記しましたように維持・発展させていくには、どうしても今の2～3倍の収入を確保する必要があります。

スタッフ一同、活動の質を向上させるべく努力していますが、より多くの人にアピールできるだけの成果を生みだすよう研鑽をつむことがまだまだ必要ですし、活動を広く効果的に知らせていく方法を開拓することも私たちに課せられた重大な仕事だと思わないではいられません。この無料配布の「特別号」も、そうした広報のための新しい試みの一つです。

皆様のお力を今一度お借りして、この10年目の節目に大きく飛躍したいと考えています。

どうかこの特別号をいろいろな方にご配信ください。あるいはこの特別号の郵送や配信を私たちにお申し付けください。一人でも多くの方に「会員」になっていただくこと、「会員」を継続していただくこと――そこから私たちは励ましを受け、日々の活動の支えを得ています。

2002年12月末までの「会員継続・拡大キャンペーン」へのご協力を、皆様に呼びかけ、心からお願い申し上げる次第です。

2002年10月27日
科学と社会を考える土曜講座・代表
上田昌文